

一 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① せまい道路をカクチョウする。
- ② 太平洋をコウカイする。
- ③ 水質のケンサをおこなう。
- ④ テンコウにめぐまれる。
- ⑤ 鉄分のホウフな食材を選ぶ。
- ⑥ 雲一つないカイセイである。

二 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ⑦ シキ折々の草花をめぐる。
- ⑧ 現場でシキをとる。
- ⑨ シュウカン誌を買う。
- ⑩ 早起きをシュウカンにする。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある年のこと、大王は、無憂宮むゆうきやうのまわりの庭をひろげて、もっと静かな、ひろびろとしたものにしたいと考えました。大王にとっては、ここが唯一ゆいいつの休養の場所であり、くつろぎの場所なので、すぐに、それを実現したいと思い、係の者を呼んで、庭の設計図を作らせました。

やがて、図面ができあがりました。大王は、それを見て、なかなかよい設計だと思いましたが、ただ一つ、気にいらぬ点がありました。それは、庭のすみのほうに、こぶのように出ばったところがあつたからです。

「これは何か。」

「はい、あいにく、そこに大きな風車小屋がありますので、いろいろ苦心をいたしました。うまいぐあいにまいらなかったのでございます。」

① 設計者は、おそろおそろ答へました。

② 「なに、風車小屋。そんなものは買い取つて、とりつぶしてしまえばよいではないか。」

大王は、事もなげに言いました。

「はい、私も、そうするつもりでございましたが、その風車小屋の主人は、がんこなおやじでございまして、どうしても売らないのでございます。そのために、そのところだけ、ぶかつこうな設計になつてしまひまして、申しわけがございません。」

臣下の答へを聞いて、大王は、

A

、と考えました。そこで、改めて、その点をたずねますと、いくら大金を出すと言つても、その主人は応じないのだ、ということがわかりました。大王は不審ふしんに思つて、さらに問いを続けました。

「それは、また、どういうわけか。」

「はい、あるじの申しますには、自分たちは代々この風車小屋でくらしてきました。今、自分の代になつて、それを手ばなすわけにはいかないと、申すのでございます。」

「そうか。すると、その小屋は、金にはかえられないと申すのだな。」

大王も一応、合点（がてん）がゆきましたが、しかし、それでは、どうしても庭の形がくずれてしまいます。なんとか、よい手段はないものかと、いろいろ考えてみましたけれども、ほかに名案もうかびません。気の毒ではあるが、これは、やはり取りこわすよりしかたがないと思いましたので、大王は家来に命じて、もう一度、説得させることにしました。

ところが、係の者が行つて、大王の命令だからと言つて話をしても、風車小屋の主人は、前と同じように、聞き入れませんでした。役人は、憤慨（かんがい）して、大王に訴（うった）えました。

「あのおやじは、まことにしたたか者で、どのようにわけを説いて聞かせましても、承知いたしません。このままに捨ておきましては、大王のご威光（けいこう）にもかかりましよう。このうえは、権力をもつて、小屋をたたきつぶすよりほかはないと存じます。」

大王は、それを聞いて、しばらく考えていましたが、

「よろしい。それでは、わたしがじきじきに説いてみよう。その男を呼んでくれ。」

と、おだやかに言いました。

やがて、風車小屋の主人は、無憂宮の庭さきにつれてこられました。大王は、わかりやすいことばで、その男に言いました。

「おまえが先祖から伝わった家を手ばなしたくないと申すのは、もつともなことだ。しかし、そこを曲げて、ゆずってもらえまいか。ここは、わたしの休養の場所であるばかりでなく、時には、外国の使臣（ししん）の接待の場所でもあるのだ。外国の使臣をまねいた時、風車小屋が庭につき出（で）ていては、いかにも見るらしい。一つ、そこを考えてもらいたいのだ。」

③「大王さまから、直接のおことばをいただきまして、なんとも恐れ入りました。しかし、このことばかりは——」

「市民にすぎない風車小屋の主人は、大王の前でも、『ノー』と答えました。」

「おまえが、あの小屋を立ちのいても、立派にくらしのたつようにしてやるが、それでも不承知か。」

「はい。おおせではございますが、あの小屋ばかりは、おゆずり申しあげるわけにはまいりません。」

髪の毛こそ、もう白くなつていましたが、まだ少しのおそろえも見せていない、がっちりした老市民は、さらに、ことばを続けま

した。「あれは、手まえどもにとつて、かけがえのないものでございます。もう、なん代となく、手まえどもの一家は、あの小屋で働いてまいりました。みんな、あの小屋で生まれ、あの小屋で育つたのです。毎日毎日を正直に働いて生きてゆく、それを教えてくれたのも、あの小屋でございます。自慢（じまん）ではございませんが、あの小屋で生まれた人間に、今まで、ひとりだつて、不正直な世わたりをしたものはいません。」

Bは折れましても、日々あの小屋のなかで働いていく喜びというのは、また格別でございます。手まえも、あの小屋のおかげで、代々の先祖が自分の職業を大事に守り伝えてきた喜びを、しみじみと知ることができました。で、せがれにも、手まえ同様、あの小屋といつしよに、この喜びを受けつがしてやりたいのでございます。それに——それに、この年になりますと、手まえも、じじいや、おやじと同じように、やはり、あの小屋で、息がひきとりとうございます。」

「これ、これ。」と、家来のひとりが口を切りました。

「その言いぶんは、もう、なんべんも聞いている。そんな泣きごとをいくたび聞いたところで、しかたがない。——おまえもよくわかつてくれなくつては、こまるではないか。よいか、大王さまはお庭をおとりひろげになろうというのだ。それなのに、そのほうは自分ひとりのつこうだけで、大王さまの計画（けいけい）をおさまたげしているのだ。——いったい、そのほうは大王さまをなんと心えているのだ。ほんらい、大王さまのお力をもつてすれば、そのほうが、承知しようと、しまいと、いやおうなしに立ちのかせるのは、わけもない事なのだぞ。それを、こうしてわざわざ、ご自身おことばがあるというのは、この上もないお慈悲（じひ）だということがわからないのか。」

「いや、おことばを返すようでございますが……」

と、風車小屋のおやじは、きつとなつて、言いました。「そんなことは、大王さまでもおできになるはずはございません。もし、大王さまがさようなことをなさるのなら、手まえはベルリンの裁判所へ訴えます。あすこの判事さまは、正しいお方でございますから、たとえ、あい手が王さまであろうと、わたしたち人民の1を、わけもなく、ふみにじるような判決はなさらないと信じます。手まえはしがない風車小屋のおやじですが、毎日毎日を正直に働いて、自分の2をまちがいはたしさえすれば、どこに出たつて、ちつともこわいことはいけません。裁判所は、どんな時にでも、正直な人民の3を必ず守ってくれます。4で取りあ

げるほうが正当か、先祖の風車小屋を売りわたさないほうが正当か、よしあしは、判事さんがきめてくれましょう。」

あるじは、おくする色もなく、堂々と自分の考えを述べたので、家来たちは、いきり立ちましたが、大王は静かにそれをおしとどめ、あるじのほうを向いて、微笑をうかべながら言いました。

「よし、よし。おまえの言うことは、よくわかった。あの風車小屋には手をつけないから、安心するがよい。おまえは、これからも今まで通り、正直に働いてくれ。」

「さすがは、大王さまだ。」

⑤ 風車小屋のおやじは、生きかえったように喜びました。そして、なんども、なんども、お辞儀をして、帰って行きました。

大王は、おやじのうしろ姿を見おくっていました。その顔には、喜びの色があふれていました。

臣下の者は、不思議に思いました。これでは庭の形が悪くなるのに、どうして大王が喜んでいいのかからなかったからです。しかし、大王は言いました。

「いや、人民があれほど裁判所を信頼していうとは、わたしも今まで知らなかった。あれで見ると、わたしの裁判官たちは、法の前では、王侯貴族も平民も、すべて平等だという信念をもって、その職にあたっているのだ。そして、人民もそれに信頼しているのだ。わたしは、それがうれしい。すべての人が法を重んじ、法に従う、これが何より大事なことだ。庭のかっこうなんか、少しぐらいどうなったって、かまうものではない。むしろ、庭がぶかっこうになったのは、人民の権利を尊重した結果だと思えば、わたしは、かえって、うれしくらいだ。」

こういうわけで、風車小屋にはいっさい手をつけないで、無憂宮の庭園は改造されました。

フリードリヒ大王が人民の権利を尊重したことを記念するために、今日でも、その風車小屋は、離宮の近くに保存されています。

(山本有三「フリードリヒ大王と風車小屋」『心に太陽を持て』所収 新潮社より)

* 原文を一部改めました。

注1 無憂宮：世間のことをいっさい忘れてのんびりくらすための宮殿。

注2 ご威光：人からおそれるやまわれるような力。

注3 使臣：外国に派遣される使者。

注4 離宮：王宮のほかに設けられた宮殿。

問1 — ①とありますが、なぜ設計者は「おそろおそろる答え」たのですか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大王は一度怒るとなかなか怒りがおさまらない性格であり、庭に風車小屋を残したまま設計図を作ってしまった設計者は、場合によっては命を失うおそれがあるから。

イ 大王の庭を設計するにあたって、小さな風車小屋すら立ちのかせられずにいる自分の無力さに設計者は気づいてしまい、今後は庭の設計から手を引きたいと考え始めているから。

ウ 完成した庭の設計図に大王が満足しないことが心配され、この後に大王がどのような反応をするのかわからず、不安だったから。

エ 自分の理想とする庭を完成させるためには手段を選ばない大王の恐ろしさを知るとともに、大王の持つ権力の大きさを改めて思い知らされたから。

オ 設計者は、大王がこの庭の完成にかけている情熱をよくわかっており、庭の設計が上手くいかなかった場合、大王の自分に対する評価が下がるのではないかと心配だったから。

問2 — ②とありますが、これと対照的な内容の一文を、大王の会話文の中から探して、初めの五字を答えなさい。

問3

A

に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア そんながんなおやじには金を出す価値がないのではないか

イ 他の市民への見せしめのためにもきびしい罰を与えようか

ウ いっそ庭の設計を丸ごと変えればよいではないか

エ わたしがじきじきに説得に出向くべきではないか

オ 風車小屋の持ちぬしが買いあげの値だんに不満なのではないか

問4

③とありますが、この表現からはどのようなことがわかりますか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大王に逆らった風車小屋の主人は、いずれ大きな災難にあうということ。

イ あらゆることに対して拒否し続けることが、風車小屋で生活する者の信念だということ。

ウ 風車小屋の主人は、この国の誰よりも大王を信頼しているということ。

エ 風車小屋の主人と大王の間では、立場に大きな違いがあるということ。

オ 風車小屋の主人は、自分の利益のことしか考えない自己中心的な人物だということ。

問5

B

に入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問6

④とありますが、大王は庭をどのような場所にしたいと考えているのですか。五十字以内で答えなさい。

問7

1～4に入る言葉の組み合わせとして正しいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 1 権利 2 権利 3 義務 4 義務

イ 1 権利 2 義務 3 権利 4 権力

ウ 1 権利 2 義務 3 権利 4 義務

エ 1 権力 2 義務 3 権力 4 権利

オ 1 権力 2 権利 3 権利 4 権力

問8

⑤とありますが、大王が喜んでいる理由を九十字以内で答えなさい。

四

次のA・Bの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A

約700万年前に人類は直立二足歩行を始めた。そして約250万年前になるとホモ属が現れて、脳が大きくなり始めた。サヘラントロプスやアルディピテクスの脳(約350〜400cc)に比べれば、アウストラロピテクスの脳(約400〜500cc)は、少しは大きくなったかもしれないが、大した違いではない。しかしホモ属になると、明らかに脳が大きくなり始めた。逆に考えれば、人類が誕生したのが約700万年前なので、約450万年間も脳はほとんど大きくなかったことになる。

「ヒトは直立二足歩行を始めたので、手が自由になった。そして手で石器などを作ったので、脳が大きくなった」という話もあるが、それは正しくないわけだ。人類は直立二足歩行を始めてから約450万年間ものあいだ、石器も作らなかったし、脳も大きくならなかったのだから。でも、それはどうしてだろうか。

脳はエネルギーをたくさん使う器官である。ヒトの場合、脳は体重の約2パーセントを占めるだけだが、体全体で使うエネルギーの約20〜25パーセントを使ってしまう。**a** 脳は、燃費の悪い器官なのである。これだけ燃費の悪い器官を維持していくためには、どんどんカロリーの高い食物を食べなくてはならない。カロリーの高い食物といえば、肉である。したがって、しよっちゅう肉を食べるようになったから、脳が大きくなることができたのだろう。そして、人類が肉を食べるためには石器が必要である。石器を作るようになったので、頻繁に肉を食べられるようになり、さらに脳を大きくすることができたのだ。

脳はエネルギーをたくさん使うので、肉食をして多くのカロリーをとることが必要だ。すると、こんな疑問が湧いてくる。**b** ライオンの脳は人類より大きくないのだろうか。初期のホモ属が食べた肉の量など、ライオンに比べたら少ないはずだ。まあ、ライオンだって獲物を捕まえるのには苦労しているようだが、ライオンには牙もあるし、(人類よりは)速く走ることもできる。初期のホモ属に比べたら、多くの肉を食べることができるとは言えない。それなら、ヒトよりも脳が大きくなりそうなものである。

でも、脳が大きくなるのって、そんなにいいことなのだろうか。本当にいいことなら、ヒトのように脳が大きくなった肉食動物が、

たくさんいるはずだ。それなのに、どうしてヒトのように脳が大きい肉食動物が、全然いないのだろうか。それはきっと、脳が大きくなることにも欠点があるからだ。

スマホには、いろいろな有料アプリがある。それらのアプリをダウンロードして有効に使うなら、毎月使用料を払っても**X**が取れるだろう。仮に、アプリを利用してお金を稼ぐ場合は、アプリの使用料より収入の方が多ければ、儲かることになる。でも、有料アプリをダウンロードしても、まったく使わなければどうだろう。毎月使用料を払うばかりで損をしてしまう。

② 大きな脳というものは、たくさんダウンロードしてしまった有料アプリのようなものだ。大きな脳があるだけで、どんどんエネルギーが消費されてしまう。つまり、どんどんお腹が空くのだ。脳の大きさがいろいろなライオンの群れがいたとしよう。もしも不幸にして、エサが全然捕まえられなかった場合は、脳が大きいライオンから死んでいくのだ。そして生き残るのは、脳が小さいライオンだ。だから、むやみに脳を大きくしない方がよいのだ。使わない有料アプリは、ダウンロードしない方がよいのである。

でも、ちゃんとアプリを使うのならダウンロードしてもいいだろう。毎月使用料を払っても、それを上回る収入が毎月入るのなら、儲かるからだ。初期のホモ属の場合、石器を作るのに必要なぐらいは脳が大きくなって**X**が取れたのだろう。それから、また少し脳が大きくなって、石器が改良され、肉が少し多く食べられるようになった。それから、また少し脳が大きくなって、仲間と協力して動物の死骸を探すようになり、肉が少し多く食べられるようになった。③ ホモ属は少しずつアプリをダウンロードして、そのつどアプリを使いこなしてきたのだろう。人類は肉を食べて脳が大きくなり、脳が大きくなるとさらに肉を食べられたのだ。

でもライオンはそうではなかった。ライオンの場合は、牙を鋭くしたり走るのを速くしたりすることは、食べる肉を増やすのに役に立った。でも、脳が少しぐらい大きくなっても、食べる肉の量には関係なかった。むしろ大きな脳は、エネルギーを無駄遣いするだけだった。アプリをダウンロードしても、使い道がなかったわけだ。毎月使用料を払っているだけでは丸損だ。ライオンは肉を食べるために牙を大きくし、人類は肉を食べるために脳を大きくしたのである。

(更科功『絶滅の人類史―なぜ「私たち」が生き延びたのか』NHK出版より)

＊原文を一部改めました。

注1 ホモ属：別名「ヒト属」とも言い、現代人の直接の祖先にあたる人類のグループ。

注2 サヘラントロプス：最古の人類の一種。

注3 アルデビテクス：ヒトに似た形態の猿の一種。

注4 アウストラロピテクス：400～200万年前にアフリカに生息し、その後絶滅した初期の人類。

注5 スマホ：スマートフォンの略。

注6 アプリ：アプリケーションの略で、コンピュータやスマートフォン上で作業を行うために使う目的別のソフト。

注7 ダウンロード：自分のパソコンやスマートフォンにアプリなどを入れること。

B

人間は、当初、か弱いきわめて小さな存在であった。哺乳類のなかでも、身体的運動能力はきわめて劣り、腕力や走力でみれば、イヌやウマに及ばない。ただ脳の発達と二足歩行による両腕の利用によって、さまざまな道具を発明し、経験に裏打ちされた知識を駆使して、しだいに他の動物たちを圧倒するようになった。

人間が頭脳という器官をもてたことの意義はきわめて大きい。そしてその頭脳の発達には良質な栄養素を含む肉の摂取が不可欠であった。頭脳の重さは、人体のたった Y にすぎないが、頭脳が活動するために必要なエネルギーは、全体総量の

二〇パーセントにも及ぶ。これは脳の細胞密度が高いため多量のタンパク質が必要とされ、その活発な活動には膨大なカロリーが消費されることを意味する。④もともと高いカロリーとタンパクを含む肉の摂取の成果が、頭脳の飛躍的な発達をもたらしたのである。

c、この頭脳を駆使しえたことで、しだいに人間は自然界において優位な位置を占めるようになった。

そもそも人間は、その初源において、植物や小動物の採取を行いながら、猛獣などが食べ残した腐肉をあさるスカベンジャーのような生活を、実に長い間続けてきた。やがて脳に蓄えられた知識と二本の腕を駆使しうるようになり、さらには言語という緻密

な通信手段を産み出した。これらの積極的な利用によって、優れた武器や巧みな陥穽などを創り出し、計画的な集団行動によって狩猟を行い、自らよりもはるかに大きな動物を捕獲するようになった。

（原田信男『神と肉』平凡社より）

＊原文を一部改めました。

注8 スカベンジャー：動物の死骸やはいせつ物を食べて生活する動物。

注9 陥穽：落とし穴。

問1 a cにあてはまる言葉として、最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なぜ イ いわば ウ そして エ たとえば オ でも カ むしろ

問2 ニカ所の X には共通する漢字一字が入ります。その漢字を答えなさい。

問3 ①とありますが、なぜライオンの脳は、ヒトの脳より大きくならなかったのですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 脳を小さくすることによって体重を軽くし、エサをとるのに有利な速く走る能力を手に入れようとしたから。

イ 脳を大きくすると同時に牙も大きくしたことにより、脳の成長が途中でとまってしまったから。

ウ 脳が大きくなるほど生きていくためのエネルギー消費が増えるので、小さい脳の方が生き残りに有利だったから。

エ 牙や速く走る能力はあったものの、石器や二足歩行の能力を手に入れることができなかったから。

オ ヒト同様に脳が大きくなった他の肉食動物と違い、ライオンは大きな脳の代わりに鋭い牙と優れた走行能力を持っていたから。

問4 — ②とありますが、脳のどのような点が「使わない有料アプリ」と似ているのでしょうか。二十五字以内で答えなさい。

問5 — ③とありますが、「ホモ属」が「アプリをダウンロード」して「使いこなす」とはどういうことですか。その内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ホモ属は少しずつ脳が大きくなることで肉を手に入れる手段を増やし、肉を分け合うことを覚えた。

イ ホモ属は石器を改良したり動物の死骸を探したりすることで食べる肉の量を増やし、脳も大きくしていった。

ウ ホモ属は少しずつ脳を使うことでエネルギーを節約し、少しの肉でも生きていけるよう工夫していった。

エ ホモ属は動物の死骸を探して保存することで肉を確保し、それを食べることで脳をだんだん大きくしていった。

オ ホモ属は少しずつ手に入れる肉の量を増やすことで、他の動物を支配する大きな脳を手に入れた。

問6 Bの文章の Y にあてはまる言葉をAの文章からぬき出して十字以内で答えなさい。

問7 — ④「もともと」は、次のア～コの中の言葉にかかっていますか。記号で答えなさい。

もともと
ア 高い／カロリーとタンパクを／含む／肉の／摂取の／成果が、／
イ
ウ
エ
オ
カ

キ
ク
ケ
コ
頭脳の／飛躍的な／発達を／もたらしたのである。

問8 AとBの文章は別の筆者によるものですが、両方の文章で共通して述べられている内容を、「脳」「高いカロリー」「肉」「発達」という言葉を用いて九十字以内で答えなさい。

